

第一章：因縁の村と、奇妙な儀式

うだるような暑さ。セミの声が鼓膜を突き刺す。

大学一年生の夏、僕――夏樹は、四時間をかけて辿り着いたその光景に溜息を吐いた。

「相変わらず、何もないな.....亀喰（かめくい）村」

狼獣人である僕の短い耳が、熱風に煽られる。

父さんが大学合格直後、妙に複雑な顔で「今年は亀喰村へ行け」と言った理由が、着いて早々に分かった。

記録的な空梅雨による深刻な水不足。村の命運を懸けた『雨乞いの儀式』に、若い人手が必要なのだとい

曾祖父である夏向の家に着くと、そこには懐かしい顔ぶれがいた。

「よお、夏樹！ 中二以来か？」

快活に笑いかけてきたのは、虎獣人の陽斗だ。筋骨逞しい体躯は、四年前よりも一回り大きくなっている。

「陽斗か。.....それに、冬樹も？」

「久しぶり、夏樹くん」

少しはにかんだのは、鷹鳥人の冬樹。相変わらず中性的で、透き通るような肌は女性と見紛うほどだ。

集まったのは、僕らと同年代の青年たち二十人ほど。

驚いたのは、村の宮司である春政さんだ。陽斗の曾祖父らしいが、虎獣人特有の威圧感がありつつも、

だが、一番の衝撃は翌日の儀式の装束だった。

「な、なんだよこれ.....っ」

境内で着替えさせられたのは、禪の上に女物の着物。

「似合ってるぜ夏樹。俺も人のこと言えねえけどな」

陽斗が苦笑いし、冬樹にいたっては完全に美少女のよう。

二十人の屈強な、あるいは可憐な青年たちが、女装で並ぶ光景は異様だった。

儀式は、御神酒と妙な風味の粥を食した後、裏山の頂上にある龍神様の祠を目指す。

「暑い.....死ぬ.....」

「なんで女物の着物なんだよお.....」

文句を言い合いながら、僕らは山頂に辿り着いた。

最後の手順は、龍神を模した石像の口に接吻すること。

順番が回り、僕が石像の口にマズルを寄せた、その時。

（.....あたたかい？）

無機質な石のはずなのに、そこには生き物の体温のような、不気味な熱が宿っていた。

第二章：狂乱の夜

その夜、僕らは神社の社務所に泊まることになった。

露天風呂で汗を流し、久々の再会に花を咲かせた後、布団を並べて横になる。

だが、僕の身体には異変が起きていた。

（なんだ.....この熱さは。股間が、ずっとズキズキする）

経験したことの無い昂ぶりに、寝返りばかり打ってしまう。

「.....夏樹、起きてる？」

突然、布団の中に潜り込んできた影があった。陽斗だ。

「陽斗？ どうしたん.....んっ！？」

言葉は、熱い唇で塞がれた。

陽斗の瞳は潤み、頬は朱に染まっている。

「夏樹、なんだか、すごくいい匂いがするんだ。我慢できなくて.....」

本来、僕は異性愛者だ。男に欲情するはずがない。

なのに、陽斗の舌が絡んでくると、頭の芯がとろけるような快楽が走り、気付けば僕も彼の首に腕を回し

「あ、は.....夏樹.....っ」

陽斗が僕の褌を剥ぎ取り、屹立したペニスを口に含んだ。

「ああっ！ 陽斗、そこっ、はあああ！」

獣人特有のザラついた舌の感触が、敏感な先端を刺激する。

ドクドクと脈打つ僕のそれは、自分でも驚くほど硬く、熱くなっていた。

そのまま陽斗は、僕の精液を一口も溢さず飲み下すと、うっとりとした表情で僕を見上げた。

それが合図だった。

「僕も、混ぜて.....」

冬樹が、自ら着物の裾を割り、M字に脚を開いて這い寄ってくる。

「夏樹くんの、欲しい。僕、本当は、ずっと男の人が好きだったんだ」

カミングアウトなんて驚く暇もなかった。

他の青年たちも、一人、また一人と起き上がり、社務所は瞬く間に獣の喘ぎと肉欲の匂いに包まれた。

僕はその夜、陽斗を抱き、冬樹の窄まりを貫き、泥濘のような快欲に溺れた。

第三章：龍神の依代

翌朝、室内はまさに「お通夜」だった。

「.....俺、男に掘られたんだよな」

「僕も.....あんなに積極的になっちゃうなんて」

正気に戻った面々は、赤面しながら俯いている。

だが、その日の昼。再び山に登り、石像に接吻した僕の股間には、さらに激しい熱が宿った。

その夜、夢の中に**「彼」**が現れた。

黄金の瞳を持つ、巨大な龍神。

『お主、四年前から目を付けておったが、やはり相性が良いのう』

「.....龍神様、ですか？」

『いかにも。ワシはメスも好きだが、オスはもっと好きでな。お主をワシの依代（依代）にしてやった。

目が覚めると、僕は陽斗に跨られていた。

「あ、夏樹.....また、止まらなくなっちゃった.....」

陽斗の窄まりが、僕のモノを締め付ける。

だが、何かがおかしかった。

「っ！？ なんだこれ、大きすぎて.....っ」

陽斗が悲鳴のような声を上げる。

僕のペニスは、前夜を遥かに凌ぐ変貌を遂げていた。

全長30cmを超え、直径は15cm。腕ほどもある巨根が、陽斗の体内を無理やり押し広げ、胃の腑を突きさらに、その根元にあるテニスボール大に肥大した睾丸には、無尽蔵の精液が溜まっているのが分かった。

「夏樹くん、僕も、僕も入れてえ！」

冬樹が、よだれを垂らしながら順番を待っている。

「俺も、俺も夏樹に突っ込んでほしい！」

獅子、牛、馬、鮫.....村の青年たちが、雌のように腰を振り、僕の巨根を奪い合う。

「ああ.....いくぞ、お前ら！」

僕は本能のまま、その規格外の剛竿を、従兄弟（またいとこ）とも知らぬ青年たちの穴に叩き込んでいく。

第四章：恵みの雨

それから十日間。

僕は食事と睡眠以外、ひたすらセックスに耽溺した。

僕の巨根に貫かれるたび、青年たちは白目を剥いて絶頂し、僕もまた、尽きることのない精力を彼らの身体に注ぎ込む。

社務所は常に精液と汗の匂いが充満し、若者たちの艶めかしい喘ぎ声が止むことはなかった。

十一日目。

村に、バケツをひっくり返したような大雨が降った。

「.....降ったな」

「ああ、降ったね」

雨音と共に、僕らを支配していた狂おしい性欲が、嘘のように引いていった。

僕のモノも、元の（と言っても以前より少し立派な）サイズに戻っている。

「みんな、すまなかった。あんな、無理やり.....」

僕が謝ろうとすると、陽斗が笑って首を振った。

「何言ってたんだ。俺たちも、あんなに気持ちいいのは初めてだった」

「そうだよ。夏樹くんのおかげで、自分に正直になれた気がする」

冬樹も、少しだけ恥ずかしそうに微笑んだ。

二週間の滞在を終え、僕は都会へ戻るバスに乗った。

身体は少し軽いが、脳裏にはあのフランクな龍神様の声が響いている。

『カカツ！楽しかったのう、夏樹。これからも精進せよ。ワシがおる限り、お主の夜は退屈させんぞ』

僕は苦笑いしながら、車窓の外に広がる、潤いを取り戻した亀喰村の景色を眺めていた。

僕の身体の中には、ド変態な龍神の分霊が、今も満足げに居座っている。

第四章：雪景色の再訪、そして衝撃の「おめでた」

しんしんと雪が舞う冬休み。僕は再び、あの「亀喰村」へ向かうバスに揺られていた。

あの夏休みの狂乱から半年。村の水不足はすっかり解消され、それどころか全国的に雨の多い実り豊かな年になった。

変わったのは村だけじゃない。僕の身体も劇的に変化していた。

筋繊維の一本一本が逞しく引き締まり、男らしい色気が増したのか、大学では異性同性問わず告白されまくった。

だが、村の集会所に一歩足を踏み入れた瞬間、僕は自分の目を疑った。

「あ、夏樹.....待ってたよ」

出迎えてくれた陽斗は、心なしか以前より身体ががっしりとして、太ももや臀部も一回り肉厚になっていた。

「夏樹くん、やっと会えた.....っ」

駆け寄ってきた冬樹も同じだ。中性的な身体つきはどこか艶を帯び、陽斗と同じように少し張ったお腹を

「な、なあ.....みんな、そのお腹、どうしたんだ.....？」

集まった二十人ほどの青年たち全員が、男の逞しい身体のまま、下腹部だけをぼっこりと膨らませていた

「どうしたって.....夏樹の子供だよ」

陽斗が少し照れくさそうに笑う。さらに驚いたことに、彼らが着ている服の胸元には、じわりと染みが広

第五章：亀喰村の真実

脳内で、龍神様が「カッカッカ！」と邪悪に笑った。

『驚くことはない。これがこの村の、そしてワシのシステムの全貌じゃ』

龍神様が語った真実は、あまりにもぶっ飛んでいた。

神様が雨を降らせるには「陰の気」が必要だが、力が弱まると能力が落ちる。そのため、相性の良い依代

その見返りとして、龍神様はオスたちに「陰の気」を流し込み、彼らの体内で増幅させてから回収する。

男を性的に食らい尽くし、孕ませる――男を「亀」に例え、それが「亀喰村」の由来だった。

『ちなみに、前回の依代は陽斗の曾祖父（春政）じゃ。お主の曾祖父の夏向も含め、当時の若いオスを全

「心配するわ！ 僕は二十人近い子供のパパになるってことかよ！」

『まだまだワシのためにも、美味しい思いをさせてやるからのう、カッカッカッ！』

ド変態すぎる神様にげんなりしつつも、目の前の「妻たち」の熱い視線に、僕の股間はすでにドクドクと

第七章：肉体の共鳴、溢れる母乳

「とりあえず、旅の汗を流そうぜ」

青年たちに連れられ、僕は雪見の露天風呂へと向かった。

湯煙の中、お互いの身体を洗い合うが、その触感は半年前と全く違っていた。

「夏樹、ここ.....もっと触って.....」

陽斗の身体は、孕んだお腹だけでなく、全体的に肉厚で官能的なラインに変化している。ペニスや睾丸も

「んっ.....あ、夏樹くん.....」

冬樹のパンパンに張った胸に触れると、ツンと尖った乳頭から、白く甘い母乳が湯船にポタポタと滴り

青年たちは僕の身体に群がり、僕のペニスに舌を絡ませる。半年前よりもさらに肥大化し、今や拳大に

「あぁっ.....はあ、みんな、もう我慢できない.....っ」

風呂から上がると、僕らはそのまま集会所の広い畳部屋へと流れ込んだ。

第八章：濃厚なる種付けの儀

「夏樹.....俺のここ、もう夏樹の形になってるんだ.....っ」

陽斗が仰向けになり、大きなお腹をさすりながら僕を誘う。

彼の言う通りだった。僕の巨根を受け入れるために最適化された彼らのアナルは、緻密な襞がうねり、持

「あぐっ.....！ ひゃあああ！ お腹の中で、動いてっ.....気持ちいいいい！！」

全長30cm超の巨根が最奥の uterine neck（子宮口）を突き上げるたび、陽斗のお腹の中で胎児がピクリ

肢体は逞しい雄そのものなのに、僕に貫かれる彼らの表情は、恋する乙女か、あるいは淫らな娼婦そのもの

「僕、良いママになるから.....っ。だからもっと奥まで、夏樹くんの全部ちょうだい！」

冬樹が激しく腰を振り、溢れる母乳を僕の胸に擦り付けてくる。

「沢山突いてくれ.....っ、お前の種で、この中をいっぱいにしてくれ.....っ！」

端正な顔立ちの竜人の青年が、自らの長い尻尾をくねらせながら、見事なM字開脚でアナルを指で広げて

「いっぱい種付けしてくれ.....ほら、ここ、空いてるぞ.....っ」

長身の馬獣人が、逞しい臀部を突き出し、早く突っ込めと言わんばかりに尻を振る。

「母乳が、止まらないんだ.....夏樹、吸って、もっと強く揉んでくれ.....っ！」

筋肉質な牛獣人が、パンパンに張った自らの巨乳を揉みしだき、白い液を飛び散らせながら絶叫する。

「クソっ.....男のくせに、ケツでしか感じなくなっちゃった.....っ！責任取れよ、夏樹い！」

雄々しい獅子獣人が、涙目で僕の首にしがみつき、腰を激しく打ち付けてきた。

「ああ、全員まとめて幸せにしてやるよ.....っ！」

僕は半分開き直り、愛しい「妻たち」の身体を次々と組み敷いていった。

ドクン、ドクンと拳大の睾丸が脈打つ。

一万年分の性欲を注ぎ込むように、僕は彼らの最奥へと、半固体状の濃厚で、文字通り溢れんばかりの

「あはあああ！熱い、熱いのがいっぱい入ってくるぅ！！」

「夏樹の種.....お腹の中に、たまってる.....っ！」

雪の降る静かな村の一角で、獣たちの狂おしい愛の交尾は、夜が明けるまで何度も、何度も繰り返され